

曲 り 節

昭和46年12月第2号

リズム教育についてのあれこれ

広島大学福山分校 沼尻 政子

(1) 運動によるリズム教育の指導法として、先づ考えられることはテンポ感を養うことである。タクトはリズム以前の問題であるが、リズムの定義としての「規則的くりかえし」をおもえば、同一タクトで運動できるということはリズムの基本として当然考えられることである。拍手をすることから、何かを叩く、歩く、跳ぶというように種々の運動を同一タクトで行うことができるようにし、又異なる運動を組み合わせても同一タクトで行なえるように導いてゆく。

さて運動のテンポは多くの調査にみられるように身体の部位、運動の方法、発育発達の種類等によってもさまざまである。

テンポ感を養うために与えるテンポは、幼児の行い易いテンポからはじめなければならない。大人の歩行テンポと幼児のそれとは当然異なる。大人のテンポによって幼児を指導しようとしても、それは労多くして効少なく、幼児にとっては酷というものである。テンポは同年令、同一運動においても個人差はあるが、幼児には幼児のテンポがある。各種運動の中から(1)歩行、(2)とび歩き(走)、(3)スキップの三種について調査を行った。(1)と(2)は普通テンポと遅いテンポをみた)

調査の方法は昭和44年6月から46年6月まで3~5才児231名、遊戯室で1分間歩かせその間に10歩ずつ5回計時を行った。遅い歩き方は大股歩を示範してから歩かせ上と同様の計測を行った。とび歩きは普通・遅

い何れも示範して行かせた。スキップはテンポを変えて行うことは困難なので動作のできるテンポにとどめた。この結果普通歩きでは3才児1分間143。4才児149。5才児136で男女差は殆んどなく、遅歩きでは3才児123、4才児120、5才児109で3才の女兒が男児より僅かに早い他は差がない。普通とび歩きでは3才児244。4才児217。5才児206。遅いとび歩きでは3才児195。4才児178。5才児172で遅いとび歩きの5才児を除いて男女差があり、又3才児では普通のとび歩きがかけこになったためテンポが特に速くなっている。スキップでは3才児104。4才児・5才児119。で男女差は殆んどない。

今回の調査から、歩くことは教師のテンポによって訓練されているためか、スタート時は遅いテンポであるが殆んど幼児はそれが長く続かず、歩き易い自分のテンポになり教師が傍で号令をかけても早くなったテンポはなかなか戻らず、戻った者でもすぐ又早くなる。

又スキップにおいては動きが複雑なために早く動くことは困難の様で教師の号令より遅くなる。この調査は幼児自身のテンポを見出したいのであったが、教師によっては心配して号令をかけてくれる方もあったが、こゝでも教師のテンポと幼児のテンポには大きな差があることが判った。(教師の号令によるテンポは採用せず) 心せねばならぬ。

(2) リズム教育の指導法として、私の知るところでは二つの方法がある。その一つについて問題を提起し意見をのべたい。

音の長短関係を理解させるために運動知覚を利用する方法があるが、こゝでは音符♩を1として♩は2倍、♩は4倍の長さであり運動は歩くことが使われている。♩で普通に歩き♩は1歩進み2拍目は出した前脚の膝をまげる。又♩は1歩進み2・3・4拍はそれぞ

れ前・横・支持脚のところへポイントする。

この方法は運動として決して♩でもなく♩でもない。前者は♩♩であり後者は♩♩♩♩である。もしこの時間関係を歩くことで知覚させるならば、♩は2拍の間流れる様に動くか又は1歩進んでそのまま待つ。(休むのではない)こうしてこそ♩と♩及び♩の時間関係は運動的にもはっきり知覚されるものと考える。

性格と研究テーマ

福岡女子大学 佐久本 稔

“運動ぎらい”に関する研究という漠とした看板を掲げて以来、速や5年目が素通りしようとしている。私の吐きも、ひょっとしたら同志にわかってもらえるかもしれない。

毎年新入生を迎えると、私は早々にレポートを請求することになっている。「私の体育史」である。これは小から大までの延べ12年間に亘る体育とのおつき合いを回顧させることによって、大学体育への導入を意図したものである。連綿と綴る一行一行を身読し、チェック・シートをつくるのが楽しみの一つになってしまった。

この研究がもたらした私自身の変革をあれこれ思いめぐらしながら、気になることは、頭初の計画の進行が、非常に遅退しているということである。理由の一つはサンプルが少いことだ。これは体育人としてむしろ喜ぶべきことなのであるが、研究の効率が悪いために、「“運動ぎらい”よ、もっと増えてくれ」というお可笑しな矛盾に陥ることがある。珍蝶の採集みたいに、どうも費用と根気がいるらしい。もう一つの理由は、私の性格があげられそうである。蝶採しの道中で道草を食う、ときには珍蝶の鱗粉を浴び、粉々に酔ってしまう道草の心理が潜伏している。優柔不断といったらビタリであろう。

そもそも私には、もの心のつき始めた学生の頃から、異端者趣味があった。こういふと多少語弊があると思うが、いわゆる標準から

はみ出た逸脱者へ、ある種の愛着を抱いていた。“わたしはミレーの落ち穂拾い”とでもいったげなセンチメンタリストのようでもある。性格検査などを実施した時など、eccentric type を執拗に追跡するあたり、もしかすると木を見て森を見ざる凝り屋なのかもしれないのだ。自己診断とは実に難しいものだ。

今は昔、一年間ほど少年院に通院していた頃、凝り屋の一端を露呈してしまった。ある日のこと、記念写真と名うって写真を撮ることになった。シャッターをおす際には、確かに全員の童顔がレンズに映っていた筈なのに、いざ出来上ってみると、肝心の数人がまるで申し合わせたかのように、瞬時顔をかくしているのである。してやられた訳であるが、彼等の鋭敏なるもの(少年院の記念写真とは何ごとだ。院生の身にもなれはあつ)に触れて、私は内心詫びてしまった。顔のない写真、当時の私は彼等を大層見直してしまった。

また教え娘にMさんというのがいる。彼女は盛夏でも長袖のブラウスを着こなしていた。何をかくそり、左腕は小児麻痺後遺症で細かった。人前に腕をさらすことが、しのびなかったのであろう。私には痛くそれがわかった。私はある時彼女に切り込んだ。「本を小脇にはさんで歩いたら何んて素適だろう」と。悲観的な医師の言葉を尻目に、私は素人の診断でエルコグラフなどを買い込んだ。研究を度

外視したる年有るに亘る挑戦を開始した。……。望みをかなえた彼女は、より強く生きていくにちがいない、置き忘れられたエルコは傷をとどめて錆ついている。その他、片肺しかないことを後から知らされたSさん、など道草の想い出はよみがえる。そうした彼等との妙な出会いは、体育のなんたるかを言わず語らず教えてくれた。今日こうして私があるのも、彼女達のお陰であるといわなければ嘘になるようにも思う。生命を蘇生する行為、これこそ体育の真髄なのではとさえ思われる。学生時代の私は中長距離ランナーであったが、いつもどん尻であった。卒業までとうとうインカレにも出られない程、フガイナイ奴であった。帖佐鬼將軍の配下でのマッサージ、飯たき等々、あの頃の私は、心の片隅で逸脱

者の悲哀をなめていた。共感者を求めながらも、大きな曲り角を歩いていた。いつだったか、女子学生とのサイクリングで、最後尾を走っていたら、「男のくせに女の尻にくっついていて」と運ちゃんから野次られたことがある。ちょっとひどすぎるなあと思ったが、否定すべからざる妙な因果関係に気づいた。私の“性格と研究テーマ”は思わぬところに血脈があった。

こうして筆を走らす今日この頃を、いつの日か、臨床体育心理学論考草創期の曲り角であったという日が訪れるであろうか。戸川さんの鮮風に浴した、身分不相応の前走的鼻唄である。先のことなど、凡夫の私にはさらさらわからない。楽しくもあり、悲しくもある。

オ ス ロ の 休 日

尾 崎 昌 恵

「尾崎先生ですか？ 庶務ですが、先生に国際電報がはいっています。取りに来てください。」と、朝の静寂をつきやぶる電話。あの件だな。断りだな、きつと。ひょっとすると？ でも、まさか……。

しかし、劇的ジャバラオン（驚愕の擬態語）で、6週間の外国生活がかなえられることとは相成る。この胸のときめきよ、

International Summer School は今年25周年で、当初はアメリカとの親善の為に企画されたものだそうだ。現在は一般コース（大学在学生在が対象）と特別卒業生コース（大学卒以上が対象）をあわせると2,3有名余り。入学式場にあてられたオスロ大学講堂が満杯になる盛況ぶりである。一般コースにはノルウエーの国語、文学、音楽、美術工芸、政治経済etc. があり、特別卒業生コースの中には私が受講した“P.E. in Scandinavia”の他に、教育、医療等に関するものもあった。

70余ヶ国から参加している若者がうち集ってなごやかに話し、歌い、笑い、あるいは

卓球やダンスに興じている。仲々いい眺めである。私も沢山の友達ができたおかげで、今年からクリスマスカードに相当の出費を覚悟しなければならぬ。日本人参加者は私の他に6人の男性が居り、知的でしかも親切な彼らから学んだことも大きい。

最初は緊張して英会話について行けず、寮で同室の2人のアメリカ女性（ひとりはい婚者、他は私と同じ体育のコース）が喋りはじめると、時差の関係もあってひたすら眠気を催し、こまった。しかし5日位でそれもなおり、食事にも適応すると順調なペースとなる。緑と水と花に溢れた爽やかな白夜の季節だ。

体育のコースは23名、日本からは私が初参加の由。リーダーはオスロ郊外の高校で体操を教えている女教師。彼女（結構な歳と思われるが）のシゴキに不平を言うヤンキー女性も多かった。

体育のコースは全てのコースの内でも最も費用のかかるものの一つだったので、それだけ活動範囲も広く、普通の陸上、球技、体操や講義のほか、日曜日を押して西海岸の山地

に氷河のハイキングやスキーに出かけたり、オリエンテアリングをしにオスロ郊外のヒュッテに泊ったりした。オスロ市内に限らず、見学した体育施設の殆んどに肋木があって、よく利用されている様子である。

白夜の9時過ぎ、終日太陽にあたためられていた森の湖で泳いだり、粉雪降る中で夏スキーをしたり…、雪を踏むのが初めてだというアフリカ青年ならずとも、一種形容し難い幸福感である。

しかし、なんといっても最高の思い出となったのは、ストックホルムにジャズ・ジムを習いに行った時、講師モニカ・ベックマンと掛け合いで踊ったこと。記憶中枢への刻印。

その他、参加学生は期間中にオスロ市ホー

ルと国王宮殿に招待され、市長やKingと握手したり真近に話したりしたが、彼らはそれぞれ重要な“ホスト”役を演じられていたという、豪華な印象が残った。

実際私はラッキーだった。自分自身、今まで確かに努力してきたと言えないのに、日本人、いや、日本女性の代表として丁重な扱いを受けたのだから。几帳面で勤勉な日本人のひとりとしてなにかをしなければ…などと大見栄はきらないが、ずっと先になって思い起こしてみた時にも「実際ラッキーであった」と言えるように、努力して行かなければ…。単なる「オスロの休日」に終わらせないように。

教育心理学会に参加して

東京教育大学 杉原 隆

本教育心理学会第13回総会は、10月9、10、11日の3日間にわたって神戸大学教育学部で行なわれた。神戸大学は六甲山系の中腹に位置し、校舎からは神戸港を一望のもとにながめることができる交字通り風光明媚の地にある。東京のсмоッグと喧噪のなかの大学に通う我々にとって、まことにうらやましいかぎりである。この学会では、発表時間は1人13分、その後発表に対する質問が2分間ある。そして、関連のある発表を5~7つをひとまとめにし、それらの発表と質問が終ったところで約1時間の討論がなされる。時間的には体育学会よりかなりゆとりがあり、とくに約1時間の討論が発表をさらに突りの多いものになっている。また発表論文集も今年の体育学会の2倍(2ページ)と多い。発表数は約350くらいであるが、直接、身体の運動に関するものはきわめて少い。体育関係からは、末利氏(京都教育大)が5才から18才までの男女を対象として①移動光源の速度の見越、②運動反応の速度、③身体運動の知覚を調べ、この3つの領域においては5才から12才の間に顕著な発達をするとい

う報告がなされた。また、筆者は、知能と運動学習の問題について、知的優秀児、普通児にむづかしさの異なる3つの図形の鏡映描写を学習させた結果を発表した。この他の、体育に関連したものとしては、

高橋爽子(別府大学) 誕生より生熟までの身体特性間の発達速度に関する研究

近藤満代(大阪教育大) 受傷傾性児の選反応と運動時間の知覚

の2つの発表がみられた程度である。

発表もさることながら、1,000万ドルの夜景、神戸牛のステーキと楽しみの多い学会であった。

体育心理学研究会会報

「曲り角」

昭和46年12月15日発行

代表 松田岩男

編集 近藤充夫

市村操

杉原隆

連絡先 東京都渋谷区西原1丁目40番地
東京教育大学体育学部 体育心理学研究室
体育心理学研究会

電話 (460) 0511(代) (内) 36